

「北極海航路活用戦略セミナー in 苫小牧」の開催

北海道総合政策部 交通政策局物流港湾室 主査 落野 憲人

平成27年7月1日(水)、北極海航路活用戦略研究プロジェクトチーム、道及び苫小牧港管理組合の共催により、「北極海航路活用戦略セミナー」を苫小牧市内で開催しました。

当日は、道内外から港湾関係者など約140名が出席し、欧州と北海道間の物流の相互関係を視野に北極海航路活用の可能性研究を進めるプロジェクトチームメンバーの講演に耳を傾けました。



セミナーの開催状況

セミナーの開催状況

まず、プロジェクトチーム代表である北海道大学の田村教授より、北極海航路の活用へ向けた北海道社会へのメッセージとして、北極海航路の活用は、北海道が世界に向かって開国するくらいの気持ちで、リスクが高くても戦略性の高い目標を掲げて進むべきと述べられました。

最初の講演は、コペンハーゲン大学北欧アジア研究所の礪波研究員から、北極海航路を通じて北欧社会がどのようにアジア諸国を見ているかをご自身の研究事例と共に紹介されました。欧州は北海道を日露関係における重要なアクターとして見ており、ロシアを挟んで北海道、ないし日本がロシアに対してどのような動きをするかに注目していると説明がありました。

次に、京都大学の古市教授からは、北極海航路とスエズ運河ルートを比較し、近年の燃料費下落やコンテナ船の大型化により、北極海航路の競争力は失いつつ

あると説明がありました。しかし、コンテナ船の大型化による供給過剰な状況が発生したことにより、北極海航路が十分に競争力を持っているという結論をもう少し時間をかけて評価する必要があるとの考えを示されました。また、北極圏で産出されるLNGのアジアへの輸送は、必ず北極海を航行するため、日本への輸入が実現することへの期待を述べられました。

続いて、北日本港湾コンサルタント(株)大塚部長からは、北海道が北極海航路の拠点を目指すため、コンテナ貨物の可能性の一つである北海道の農水産物を欧州市場へいかにして投入するかといった戦略を持つべき。例えば、ロシアや中国が定期航路を開設した際にはその航路を北海道へ立ち寄らせるための策として、農水産品の輸出があると述べられました。

最後に、地元を代表して苫小牧港管理組合の柏葉専任副管理者からは、苫小牧港の現状と北極海航路の東アジアの拠点としての苫小牧港の可能性についてなど、地元の見解での話がありました。地理的・気象的な優位性、定期航路の集積、陸海空の交通ネットワークの充実、臨海企業の集積など、苫小牧港が持つ優位性を生かすことで東アジアの拠点となることへの期待を述べられました。

本セミナーは出席した道内の関係者にとって、北極海航路の最新情報を共有できる良い機会になったと思います。道では、北極海航路の玄関口という地理的優位性を有する道内各港において、航路の活用に向けた取組が一層進むことを期待しており、今後も北極海航路に関する情報発信を行っていきたいと考えています。



北海道大学 田村教授



コペンハーゲン大学
礪波研究員



京都大学
古市教授



北日本港湾
コンサルタント(株)
大塚部長



苫小牧港管理組合
柏葉専任副管理者